課 題 名　　新たな病害虫対策と次期モモ産地への取組
指導対象　　★果樹栽培農家(約 2000 名)、★JA 紀の里もも部会(約 900 名)

１．取組の背景・ねらい

紀の川市は県における栽培面積の 76.1%を占める県内一のもも産地である。しかし、近年はクビアカツヤカミキリの被害拡大、温暖化の影響による作柄の不安定や中生品種のバリエーション不足等が懸念されている。

そこで、重要病害虫の発生抑制、「つきあかり」早期大果生産に取り組み、ブランド産地としての維持、発展に取り組む。

２．活動内容と成果

クビアカ幼虫の掘り取り

ＪＡ、市役所等関係機関と連携してクビアカツヤカミキリ巡回調査･悉皆調査を延べ 796 園地調査した結果、もも、すもも、うめでの被害発生 23 園、被害樹 82 本であった。さらに農家からの通報で確認した被害を含めると R6 年度の被害は 51 園 273 本と、R5 年度までの約 2 倍となり、目標増加数を大幅に上回り、被害の拡大が明らかとなった。被害確認の際には幼虫の掘り取り、殺虫剤の活用、成虫脱出防止のための脱出穴の閉塞を指導した。

もも「つきあかり」に中間台木を用いた早期大果生産については、紀の川市桃山町の現地ほ場の白鳳中間台とかき・もも研究所の中間台果実について調査した。対照はかき・もも研究所のおはつもも台の果実について比較した。現地ほ場の果実は平均 305g となり、かき・もも研究所の中間台、おはつもも台より大きくなった。ほ場条件の違いがあるので単純に比較できないが、中間台による大玉化の効果があると推測できる結果となった。

３．農家等のコメント（紀の川市　Ｍ氏）

クビアカツヤカミキリの被害が拡大している中、早期発見が大事だと思っている。

もも「つきあかり」に中間台を用いると、果実が大きくなる傾向が確認できたので、今後植え付ける苗木は中間台を活用したものにしていきたい。さらに周りの農家にも広めていくことにより産地の活性化に繋げられたらと考えている。

目　標　管　理	現状値 (R6 年)	目標値 (R8 年)	年度実績値		
			1 年目 (R6 年)	2 年目 (R7 年)	3 年目 (R8 年)
被害園増加数 10/年（園） 被害増加本数 70/年（本）	62 261	92 以内 471 以内	113 534		
中間台試験導入園（園）	1	10	1		

担 当 者：金岡晃司、上野山浩司、遠田浩平
協力機関：ＪＡ紀の里、かき・もも研究所